

ヒロシマ：この世の地獄の面影から世界平和都市へ

1 打ちのめされながら、灰から復活した国民

広島市は100万人以上の人口を有する経済活動が盛んな都市である。同市において最も訪問されることの多い場所は、1945年8月6日8時15分に米国によって投下された原子爆弾の被害者を追悼する(広島)平和記念公園である。広島に投下された原爆は14万人(ママ)に上る死者を出した。3日後には長崎にも原爆が投下された。

原爆ドームは、人々が日常生活を営んでいた70年前の朝に我々を引き戻す。原爆ドームは原爆による荒廃の記念碑であり、核兵器廃絶を世界に訴えるため原爆被害を受けた当時の状態のまま保存されている。

広島平和記念資料館には、原爆被害者の遺品が展示されており、原爆投下時に自転車に乗っていた子供の自転車など、被害者から集められた数々の衝撃的な証言が展示されている。証言によると、子供の父親は混乱と混沌の中で、子供の遺体をヘルメットと自転車と一緒に自宅に持ち帰り、自宅の庭に埋めた後、何年もの間そのままにしておいた。その後、説得に応じ遺体を掘り起こすと共に、息子の所有物を同資料館に寄贈することとなった。

2 被爆者キシダ・ヒロコさんへのインタビュー

被爆者キシダ・ヒロコさんは、6歳だった当時、同落下地点から1.5キロメートルのところに祖父、母及び弟と住んでいた。お風呂場にいた彼女は、空襲警報を聞いた後、耳を劈くような音が聞こえたので、好奇心から窓から顔を出して外を見た。「目、口、鼻、耳を押さえたが、気絶した。その後、何時間経っていたのか分からないが、意識を取り戻した時、頭部はがれきや破片に囲まれていた。」母が悲鳴を聞いて彼女を助けたものの、2階建ての家は1階部分しか残っていなかった。キシダさんは「1階に居た祖父は、右半身が麻痺して動けなかったため、子供達と母に逃げるよう指示した。母は弟を背負って外に出た。私は祖父に戻るからと伝えたが、外に出た途端、家は崩壊した。それ以来、祖父に会うことは無かった。」旨述べた。

キシダさんは「道中、殆ど裸の焼け焦げた人々を見た。自分も火傷があり、また、裸足だったが、その時は痛みを感じなかった。その日、天気が良かったのに突然黒い雨が降った。その情景を忘れることは一生ないだろう。黒い雨はトマト畑に降り注いでいた。また、若い母親がもう死んでいただろう二歳くらいの子供を背負いながら、子供が朝から何も食べていないと言いながら人々に食べ物を乞っていた情景も忘れることができない。」と述べた。

キシダさん達はその後、農家が用意した避難地域に連れて行かれ、同地域にいた人々には一つずつおにぎりが配られた。そこで母の友人とも再会できた。原爆投下の翌日、キシダさんは、母と共に祖父と兄を探しに自宅に戻ったが、自宅は未だ高温状態であったため近づくことができず、祖父の遺灰及び遺骨を収集することはできなかった。キシダさんの母はその後毎日、原爆投下時、学校に行っていた兄を探し続けた。

キシダさんは当時を思い出しながら「奇跡的にも原爆投下から一週間が経った8月13日、母は兄を背負って戻ってきた。兄は原爆投下時、落下地点から8キロ離れた場所に居た。足と背中に火傷を負っていたが、兄が避難していた場所には医師が一人しかおらず、火傷した箇所は悪臭を放っていた。その後、自宅での民間療法により少しずつ回復したものの、火傷はケロイドになってしまい、友達から差別されたりいじめられたりした。」と述べた。

キシダさんの夫は当時6歳で、落下地点から僅か一キロに居た母と兄弟を無くした。父は生き残ったものの、原爆投下から一ヵ月後に放射能の副作用ともいえる嘔吐と下痢を繰り返し、結果、夫は孤児となった。

キシダさんはインタビューの中で「原爆投下から70年経ち、広島は完全に復興し現在は平和都市となった。もし原爆ドームが無ければ、広島市はその他の都市と何も変わらないでしょう。日本全国からの支援により広島市は前進することが出来た。」と述べ、また、「戦争とは人間が人間でなくなり、殺人が犯罪ではなくなる状態のことを言う。我々はそんな状況を許容することは出来ない。世界中から核兵器が無くなり、世界平和への土台が築かれることを望む。今の若い人達は(原爆投下について)知らないの、私のような被爆者が原爆投下について語り続ける必要がある。」と語った。

原爆投下後広島を訪れた最初の医師であるマーセル・ジュノー医師についても言及した。フォースター国際赤十字協会副会長は、2004年に同医師に関する写真展の開会式において、「ジュノー医師は、協力者を通じて1万5千トンに上る医療品を調達し、4日間に亘り病院を回り、何が起こったかを調査した。人間の想像力を遥かに上回る情景を目にしたようだ。」と述べた。

3 松井一實広島市長による2015年8月6日の平和宣言の一部抜粋

「現在、世界には未だに1万5千以上の核兵器が存在し、核保有国のリーダー達は、核をもって威嚇することを止めず、自国の利益しか考えていない。核兵器が存在する限り、いつ何時、誰が新たな被害者となるか分からない。万が一、一度でも核兵器が使われるようなことが起これば、国境を越えて無差別的に被害がもたらされるだろう。世界の皆さん、広島の被爆者の言葉を聞いて下さい。」